

高齢口腔がん治療後患者の QOL についての調査報告**A quality of life (QOL) survey in the older adults with post-treatment oral cancer**

○柴田由美¹, 原田由香², 木村有子¹, 飯泉嘉基², 高橋浩二²⁻³

○Yumi Shibata¹, Yuka Harada², Naoko Kimura¹, Yoshiki Iizumi², Koji Takahashi²⁻³

¹昭和大学歯科病院 歯科衛生室・昭和大学大学院保健医療学研究科

²昭和大学歯学部 スペシャルニーズ口腔医学講座 口腔機能リハビリテーション医学部門

³医療法人徳洲会館山病院口腔機能リハビリテーションセンター

¹Showa University Graduate School of Health Sciences

Showa University Dental Hospital, Division of Dental Hygiene

²Division of Oral Function Rehabilitation Medicine, Department of Special Needs Dentistry, Showa University School of Dentistry

³Oral Function Rehabilitation Center

Medical Corporation Tokushukai Tateyama Hospital

【目的】 高齢者における社会参加の減少は、活動性の低下、食事摂取量の減少、低栄養からサルコペニアに至るフレイルサイクルに陥り、要介護のリスクが高まる。一方、口腔がん治療後患者においては咀嚼、嚥下機能などの口腔機能が低下し、QOL や社会性が低下する。今回、口腔がん治療後高齢患者への調査により身体機能、口腔機能および社会参加の変化ならびに QOL との関連を検討した。

【方法】 2つの大学病院診療科の口腔がん治療後高齢患者 107 名（前期高齢者 36 名，後期高齢者 71 名）を対象とし、2019 年度と 2021 年度に介護予防ニーズ調査から抜粋した項目と健康関連 QOL の SF-8 について質問紙調査を行った。この 2つの年度について身体機能、口腔機能、社会参加活動をクロス集計と χ^2 検定で比較し、SF-8 と社会参加の頻度を Mann-Whitney の検定で検討した。有意確率は 5 %とした。

【結果・考察】 2019 年度 107 名，2021 年度 69 名の回答が得られた。身体機能と口腔機能は低下がみられたが、有意差はなかった。社会参加では後期高齢者は地域活動等の参加の割合が有意に減少し、参加頻度も「月 1 回未満」が有意に増加した。

SF-8 では、2019 年度の前期高齢者において社会参加の頻度「週 1 回未満」では MCS（精神的サマリースコア）、下位尺度の SF（社会生活機能）、RE（日常役割機能（精神））が有意に低かった。また、「月 1 回未満」では前期高齢者と後期高齢者で RP（日常役割（身体））の QOL が有意に低かった。以上から、口腔がん治療後後期高齢患者では社会参加が減少し、フレイル、要介護状態になりうる事が懸念された。また、社会参加頻度が多いと精神的 QOL が高いことから、社会参加支援の必要性が示唆された。

【結論】 高齢口腔がん治療後患者においては、身体機能、口腔機能を保つための支援および社会参加活動への支援の重要性が示唆された。